

読売新聞に記事が掲載されました

6月16日(金曜日)

読

書

新

聞

(第3種郵便物認可)

アイバンク新規登録1444人

全国トップ 献眼運動効果で急増

県内の2016年度の新たなアイバンク登録者は1444人で、全国最多だったことが分かった。公益財団法人茨城県アイバンクの運営に関わる県内のライオンズクラブ(LC)が登録を呼びかけるキャンペーンを展開したことなどが奏功した。多くの患者が角膜移植を待つ中、LCは引き続き献眼への理解を呼びかけていく方針だ。

アイバンクは、死後に提供された角膜の移植を待つ患者にあっせんする公的機関。茨城県アイバンクは1982年に設立、LCの寄付やあっせん手数料などを財源に運営されている。

新規登録者が16年度に急増し全国トップとなったのは、県内LCが「メンバー1人が1人の登録」を目標に、地元の祭りで登録を呼びかけるのぼり旗を設置するなど運動を展開したためだ。LC国際協会3000-E地区の須鎌祥行・献眼委員長は「アイバンクの存在が浸透し、地域に角膜移植への理解が広がった。今後



も続けたい」と話した。

同バンクによると、県内の累計登録者数は07年度の4万1505人から16年度には5万1072人になった。累計献眼者数も07年度の365人から16年度には583人に増えた。一方で、毎年20人前後の患者が移植を待っている。

移植で視力が回復
「感謝でいっぱい」

角膜移植を受けた患者は提供者に感謝している。ひたちなか市の自営業花



花田さん

田誠治さん(49)は中学生の時、角膜の一部が突出して強度の乱視状態になる「円すい角膜」を発症。飛び出た角膜とこすれて激痛が起さるため、コンタクトレンズは1日数時間しかつけられなくなった。

1999年に角膜の移植手術を受け、1か月後には文字などがくっきり見えるようになった。「こんなに



小沢院長

回復するとは思わなかったので感動した。提供者の方には今も感謝の気持ちでいっぱいです」と花田さんは振り返った。

一方、角膜移植に関わる眼科医は24時間態勢で対応することになる。

小沢眼科内科病院(水戸市)の小沢忠彦院長もその一人だ。角膜移植は死後12時間以内の眼球摘出が望ましいとされ、茨城県アイバンクから連絡があると、すぐに駆けつけ、眼球を摘出して角膜から移植用の切片を作る。

小沢院長は「夜中に眼球を摘出し、明け方まで角膜の切片を作り、そのまま外来診察も行ったこともある」と話した。

アイバンクは年齢に関係なく、白内障などを患っていても登録できる。茨城県アイバンクによると、今年5月には県内の最高齢登録者だった潮来市の鈴木キチさん(5月20日に105歳で死去)の角膜が患者に提供された。

最高齢提供者は105歳
角膜に年齢関係なし

ん(62)がライオンズクラブ会員で、10年ほど前に登録。篠塚さんによると、緑内障と白内障を患い、手術も経験した鈴木さんは「角膜が誰かのために役立つなら」と提供を望んでいたという。「今も誰かの目を通して見守ってくれていると思う」と篠塚さんは語った。